

パーソン・センタード・アプローチにおける家族/ カップル療法

著者	中田 行重, 清澤 千絢, 阪本 久実子
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	7
ページ	121-130
発行年	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/9976

パーソン・センタード・アプローチにおける家族／カップル療法

関西大学臨床心理専門職大学院 中田 行重・清澤 千絢・阪本久実子

要約

本稿はパーソン・センタード・アプローチの立場における家族／カップルの扱いを考察する。家族／カップルの中の個人の話をつただ聴くばかりでは意見が衝突したり、ある人が場を支配したりするばかりで、家族／カップル療法など成立し得ないこともあるだろう。その点、O'Leary は Rogers の6条件を指針として積極的なファシリテーションが必要であると説く。そのために構造化や介入が必要であるが、これは一見、指示であっても、個々の参加者にとって自分を大事にされる体験となるファシリテーションである。個人の尊重を家族／カップル相手にどのように実践するかについて、O'Leary and Martha B. Johns (2013) を紹介する。

キーワード： multidirectional partiality、Rogers の6条件、ファシリテーション

I. はじめに

パーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach, 以後 PCA) のベースには、個人は自分の実現傾向を発現させていくために、負っている価値の条件から解放される必要がある、という考えがある。これは、クライアント (Client, 以後 CI) が家族から自律して、その個人としての固有の在り様や潜在力を開花させていく、というイメージを連想させるものである。おそらく、Rogers が自伝などで述べているように、プロテスタントの厳しい家族風土の中で育った彼が、親の考えから分離し、自分独自の考えを発展させることを成長と考えているふしがある。Rogers の理論的な到達点の一つ、「十分に機能する人間」にも、個人が社会的な規範ではなく、内なる自分を信じていくことが一つの側面として描かれているように、彼の理論は一貫して個人を置き、尊重することを重視している。その分、社会や家族がその対極にあるかのようなイメージがある。

それを考えると、PCA のセラピスト (Therapist, 以後 Th) が家族をどのように扱うかは興味深い問題である。個々人の実現傾向を重視する限りは、セラピーに参加した家族／カップルの間に対立がある時、そのそれぞれに Th が共感し、受容していくことなど出来るのか、出来たとしても家族はバラバラになるのではないか、という不安を、PCA の Th なら多少なりとも持っているだろう。中には、家族というまとまりを考えることはない、とか、家族を相手にするのは個々人の CI にとって妨げである、と考える人さえいるだろう。

しかし、実際の心理臨床では家族／カップル相手のセラピーをする機会が少なからずある。その場合、PCA ではどう考えたらよいだろうか。O'Leary は家族／カップルを相手にしながら、Rogers の必要十分条件 (1957) を保持し続ける Th のあり方を明確に示している。日本ではまだ PCA の家族／カップル療法という考え方を耳にすることさえ殆どない状況に鑑み、本稿はそれに関する O'Leary の考え方を紹介する。

なお、以下の文中ではCIのことを“CI”だけでなく“家族”や“参加者”などと呼ぶこともあるが、これはO’Learyの論文に沿わせているためである。中には筆者らが分かりやすさを考慮して、書き換えている箇所もある。

II. O’Leary & Johns “ Couple and families” (2013) の要約

【はじめに】

現代の家族／カップル療法はRogersの影響を受けており、それはCIと協調することや、CIを中心に置いて対話的・共感的に話を進める等の特徴に現れている。リフレーミングや積極的なファシリテーションなどの技法にもPCAの考え方に通じるものがある。PCAの家族／カップル療法の目的は、安心できる風土を作ること、それぞれが自己一致し、お互いに耳を傾け、共感と受容を示すようになることである。それによって家族／カップルは自分たちが解決できる問題は解決し、理解し受けとめるしかない苦しみはそのまま受け止められるようになることを目指す。

PCAの初期には家族／カップルについての論述がなかったが、次第に出てきた。このうち、Gaylin (2001)とO’Leary (2012)が、家族成員の個々の要求のぶつかり合いのなかで、CIへの理解や支持をRogersの6条件に即した形でいかに示すかについて述べている。そのほか、Person-Centered-Therapy (以後、PCT)と家族／カップル療法主流派とのかけ橋となったものにEmotion Focused Therapy (以後、EFT)系のセラピー (Greenberg & Johnson, 1988; Johnson, 2004)がある。それは頻繁に生起するパターン、例えば一人が怒りを表出すると、もう一人が引いてしまうというパターンを見つけ、それに替わるモデルを提案する。つまり、一方のCIによる怒りや非難など否定的な表出を心の底の感情や欲求の表現に変換するのである。同時に、Thは控え目なCIが思いやりを表現でき

るよう、防衛の回避を促す。

家族／カップル療法における共通の効果要因を書いた最近の著書 (Sprenkle et al, 2009)によると、PCAの中核条件はどの学派の家族／カップル療法においても必要不可欠であるという。また、上記のEFTのカップル療法は最も信頼のおける2つの家族／カップル療法の1つと認定されている。また、ポストモダンセラピーは各人の主観的世界を重視する点でPCAに極めて近い。ナラティブ・セラピー (White, 2007)はCIの主体性、あるいは問題と分離した存在としてのCI、というPCAの考えに対し、ポストモダン派側からの賛同を表明している。Boot (2001)は、Rogersの6条件を深く理解しておくことは家族／カップル療法家にとって必要なこと、と述べている。

【パーソン・センタード家族／カップル療法の実際】

◆それぞれの人を理解し、受け入れようとする気持ちであることを積極的に示す

まず、Thは(※家族やカップル全体に対してでなく)そこに参加してくる一人ひとりに対して、歓迎を示す。そして、ここに来た理由をひとりひとり話し、互いに耳を傾けるよう促す。Thが行うことは、多方面に向けられた肩入れ (multidirectional partiality) (Boxzormenny-Nagy & Ulrich, 1981)である。つまり、誰の味方にもならず、しかし、全員の考えを積極的に言葉にするという立場で、それぞれの人を最大限に深く理解し、それぞれの人にとって信頼できる翻訳者になるということである。

Thは、そこに来ている人は、静かな人もよく話す人も、あるいは感情に開かれている人であっても明らかに防衛的な人であっても、それぞれ、この場で精一杯のことをしていると捉えている。Thは、特に初期のセッションでは、それぞれの人の発言を積極的に言葉にして返す。そうすることで、それぞれのCIが他の家族に対する感情をそのまま感じられるようにしておくためである。

Thの内面では、あるCIに対する同情が他のCIに対してよりも深くなる、ということが起こりがちである。この時のThの仕事は、理解し難いCIに対して理解したいという思いやオープンな気持ちを持ち続けることである。情緒的な寄り添いを求めているのはある一人のCIだけだと捉え、パートナーや親、或いは子どもなど他の参加者をサポーターや敵対者、あるいは傍観者にしないことも大切である。例えば、支えられていないと感じている妻だけがCIでなく、無反応で硬い夫もCIなのである。

また、ある参加者が他の参加者の言い分を、はっきりと口に出さずとも、認めてない場合がある。しかし、Thはそれとは関係なく、「自分はそれぞれの参加者を理解したいのです」と言うことがある。「まず親御さんからお聞きして、そのあと、子どもさんの話を聞こうと思います。いいですか」などと伝えるのである。

さらに、Thは家族やカップルを全体として理解し受け入れる必要もある。セラピーでは家族やカップルも「どうして自分たちはこんなひどい状況になったのか」と情けなく感じ、Thにもダメな人間だと思われていると考えがちである。Thのちょっとした素振りにも敏感である。逆にThが心配のする必要のない存在（Friedman, 1991）だと分かると安心する。またThは時に、全員の立場からの気持ちを一度に述べるというinterspace reflection（Gaylin, 2008）をすることもある。例えば、「Claireが“もっと独立したい、一人の時間がほしい”と言うと、Jonathanの方はもう自分は必要とされてないと感じるのですね。お二人のどちらも相手をコントロールしようとか、追いやろうなんて思っていないにも関わらず、Jonathanは追いやられたと感じるし、Claireは身動きがとれないと感じるのですね」のような言い方である。

◆セッションの構造化、特に初回／最終回とセッション開始／終了時に注意すべき点

Thに積極性がないと家族／カップル療法は役に立たないどころか、家族／カップルを傷つ

ける。しかし、Thの積極性つまり、家族／カップル療法の構造化とは、上の立場から方向づけること（教える、助言する、解釈する）ではない。それぞれの参加者が自己一致し、自分で決定できる場にするのである。セラピーの枠組みを構造化する理由を3つ述べておこう。一つは、枠組みがなければCIは家族の中で既に出上がっている反応パターンに絡め取られてしまい、相手が孤立の中で感じている気持ちに耳を向けられなくなるからである。二つ目は、枠組みがないとよく話す人がセッションを独り占めするからである。最後に、もし枠組みがないために、参加者に混乱や行き場のない怒りだけが残ると、セラピーに来なくなる可能性があるからである。

◇セラピーの始まり

まずThはCIに、ここに来た目的を話していただけますか、と促す。そして、「(Thがセラピーですることとしないこと、について)自由に質問してください」、と言う。Thからは次のことをはっきりと伝える。「それぞれの参加者が発言の機会を持てますが、Thはほかの参加者との対話を促すために話を遮ることもあります。誰もが反対意見を言うことも怒ることも、落胆する権利もあるし、ネガティブな気持ちを分かってもらえることも出来ます。しかし、侮辱や軽蔑的な態度は言葉に出さなくてもセラピーを妨げることになります」。これを参加者全員が共有しておかないとセラピーにならない。しかし、Thによるこの枠組み作りが参加者にとって、Thが無理を強いているとか、問題解決の妨げになると感じるなら、そう言って欲しいとThは参加者に言う。

◇各セッションの始まり

Thは全員に今日は何を話し合いたいかを尋ね、どこから始めるかの合意点を見つけるよう促す。後回しになったテーマはThが責任を持って後で取り上げる、と伝える。また取り上げられなかったテーマがあれば、最後にそれを確認する。そのテーマを提案した人がまだそのテ

ーマに関心を持っている場合は、次回のセッションの開始時に取り上げるかどうかを確認する。この確認をしないと、“自分は納得してないのに、他の人の希望で勝手に別のことがテーマになっている”、と感じるCIが必ず出てくるからである。この確認プロセスに多くの時間はかからない。

◇各セッションの終わり

以下のプロセスが踏めるよう、終わりの5分から10分を残しておく。参加者自身がそのセッションで起こったことを振り返る。また、傷ついたり落胆したりしたまま終わる人がいないか確認する。合意できた点および解決に至らなかった問題も確認する。セッションの終盤は、問題に再度入り込まないようにする。でないと、セッションに不満感や無意味感をもったまま終わるCIが出てくるからである。最も大事なことは参加者にセッションで起こったことを振り返ってもらうことである。この時、他の参加者がセッションで語ったことの中で、自分にとって意味があったと思えることを挙げてもらうことが良い場合もある。そのために、Thの積極的なファシリテーションが必要になる。家族/カップル療法を受けたCIの報告を読むと、彼らは、家族がより親密で理解し合えるようになることを望んでいることが分かる（Chenail et al, 2012）。

◇セラピーの最終セッション

セラピーの最終セッションは可能な限り、プロセス指向の話し合いのセッションにするのがよい。セラピーを始める前と今では何が違うのか、家庭での変化につながらなかったものは何か、何が解決し、何が未解決か、自分の中のどんな変化を家族に見て欲しいかなどを話し合うのである。これらの質問はRogersの6条件を形にしたものであり、セラピーのどういう面がCIにとって促進的だったか、それがなかった場合はどうだったのか、に関するCIの体験過程に焦点を当てているのである。

◆セッションの中でそれぞれの人の目的を明確に

し、引き戻すために質問すること

家族/カップル療法では質問することを重視する。しかし、それは情報収集のためではない。CIに内省を促し、責める側と守る側に分かれてしまった家族間にコミュニケーションの架け橋をかけるための質問である。家族だけだと責めや失意ばかりで先の見えないコミュニケーションが繰り返され、自分の思いを率直に言うことなどとても出来ないと感じているCIは、個人セッションであれば憚られるような踏み込み過ぎの質問であっても、問い掛けて欲しい、と望むことさえある。

以下に例を挙げる。CIが不安定になったり議論するようになったり、何を話しているのかわからなくなった時、ThがCIにここに来た理由を伝え、思い出させると、CIは対話の場に戻ることができる。他の例としては10代の子どもや動機のないパートナーの場合である。彼らははっきりと答えないことが多い。Thは共感的推測を一步進め、自分の言いたいことを言う権利があること、気持ちの準備ができてから会話に入ればよいことを「今から時々質問をしますが、答えなくてもいいのです。また、言われたことに対して、違う意見や付け加えたいことがあれば教えてください」と伝える。親はこのような緊張したセッションに子どもを強制的に参加させがちだが、Thがこのように言うことで、親のその荷を解いているのである。更に次のような例もある。「何を求めているの」とか、それに類似の質問は、特にCIが怒りをセッション中に表した時に役立つ。Thがそこにいる、ということが、CIが怒りを表現する上で重要なのである。ThはCIの怒りを、怒りが出てきた経過と共に捉え、それを文章にして表し、CIの感じていることを理解しようとする存在である。そうすると、これはもはや単に怒りが出たというものではない。セラピーの部屋で口に出して表現された怒り、なのである。その時、Thは「あなたが今本当に理解してもらいたいことは?」「イライラしている時にパートナーに

求めるものは？」などの質問をする。

◆変化させようとせず、それぞれの人の自己実現を支持すること

家族／カップルは、自分は受け入れられている、だから率直に物が言えそうだ、という雰囲気を感じた時、問題の解決を見出したり、どうにもならない現実を受け入れたり、という段階に一步進む。いがみ合う家族の間であって、Thが中立の通訳者として両者に共通のゴールを見つけようとするのが、CIチームの一員として新しい可能性を探し出そうとすることになる。急ぎ立てたり強要したり、プレッシャーを与える必要もなければ、逆に変化を求めて説得する必要もない。家族／カップルの言葉や態度の変化にThが気づき、それに言及することが、その家族／カップルに問題解決を促し、変化させる能力を取り戻させる。実現傾向を信じているThは焦ったり不安になったり、責任を背負い過ぎたり悲観的になるのではなく、腰をすえてCIに向き合う。

Thが担う重要な役割はいくつかある。問題に評価を加えず、そのままをCI全員の前に提示すること、CIが自分や相手の言葉、あるいは口調の変化を観察できるように、会話のテンポを落とすこと、話し手に対する聞き手の反応の様子を言葉にして伝えること（例えば、「あなたはこの数分間、じっと聞いていましたね。あなたの中でどんな気持ちが動いているか、言葉にすることが出来そうですか」など）である。また、時として、「今までと何か違う気分がありますか」という質問をして、CI自身の中に起こっている問題解決への新たな取り組みの意欲の芽生えや、その反対に、主体的に取り組めないと感じる理由について内省を促すこともある。さらに、CIの何らかの変化に気が付いたら、「この1週間で、あなたの中で何か変化が起こったと考えてもいいですか」など、ポジティブな変化だけでなくネガティブな変化に対しても質問する。それによってCIは自分たちの関係を硬い、変化の起こらないものではなく、変化し得るも

のとして捉え、注意を向けるようになることを可能にする。また、Thはセッション毎のCIの違いを観察し、言葉や振舞い、雰囲気の変化は何に因るのか、と質問したり、CIが今までとは異なる視点から発言をした場合など、そのあらゆる瞬間を捉えて応答したりすることが求められる。

例えば、次のような応答である。結婚生活にひどく行き詰まっていた夫が「僕はそのことを訊いた、でも君は電話を切った」と言い、妻は「私は電話を切っていない。あなたのほうが電話を切ったのよ！」と返事をした。その時、Thはこれを重要な瞬間ととらえ、「私の理解は合っていますか。あなた方は二人とも、お互いに相手が電話を切ったと思いながら暮らしてきたんですね」という言葉を投げ掛けたのである。

◆訓練の機能

関係を扱うセラピーに影響を与えるのは人と人との間の感情的なやり取りだけではない。親しい人の言葉や行動の背後にある文化的／発達の様々な要因に対するCIの捉え方、も影響を与えている。ネガティブな感情は相手に対する間違った期待の結果であることがある。ThはCIそれぞれの体験に一貫して共感的反応を示しながら、CIの関係性に影響を及ぼしている様々な外的要因にも気づいている必要がある。苦境に陥ることになった外的状況に言及することは、CIに対して同情と、あなたの苦しみは自然なものだと思う、という受容を示すことになる。

経済的な悪化、先祖の違い、男女の社会的立場の違い、予期せぬ病、老い、子どもの誕生、子どもの障がい、生理学的な性転換、（口に出さない場合も含めて）同性愛嫌い、異性愛主義、などの状況は多くの人に起こり得ることである。しかし、これらは家族／カップルにとって圧力となって、相手に対する不満、恨み、時にはむき出しの攻撃を引き起こす。筆者の考えでは発達上の問題に注意も向けることなく、有意義な家族／カップル療法を行うことは不可能である。例えば、カップルが待望の赤ちゃんの誕生を喜ん

でいても、誕生後は一般に彼らは困難と喪失の時間を体験する。ThはCIがこの苦しい時の強い感情を口にすることを止めたり、緩和させたりはしない。そうではなく、自分本位の思いやりのない非難の応酬に替えて、二人が共有できる喪失や失望、と考え直せるかもしれない、と考えるのである。また、“And Baby Makes Three” (Gottman & Gottman, 2007) のような著書を勧めることもある。

ThはCIの体験を共有し、問題に対する見方を提案することもある。といってもThは解決策を提案する専門家ではないので、誰もが大事にされる形での変化を求めるグループの一員として、である。多くのCIは宿題を出してくれとか、読むべき本を教えてほしい、とThに求める。コミュニケーション訓練 (Stuart & Jacobson, 1987) や関係性に関する Hold Me Tight (Johnson, 2008) のような読み物、研究に基づく Seven Principal for Making Marriage Work (Gottman & Silver, 1999) のような情報を提供し、CIの資源としてもらうこともできる。

◆ CIがより深い感情を表現するためのThの一貫した非防衛的態度

CIがThに対して異議を唱えたり腹を立てたりする場合は、CIが学び成長する良い機会である。このような時でもThが防衛的でなければ、CIは自分にとって最も大切なことをそのまま話しても大丈夫だと感じる。そうなると、愛する人に対しても心を開いて率直に話せそうだと感じるようになることがある。

Thが自分自身の人間性について語ることは時として役立つ。人間性を否定したり隠したりすることは、CIの役に立ちたいという目的の妨げになる。全てのThはそれぞれ一人の個人としてパートナー関係を持ち、友人や子どもであり、兄弟、父や母である。それが上手くいっていることもあれば、そうでないこともある。動きの取れない状況の中で分からなくなり、相手に声を張り上げることもある。時には突然、頑固になって、意地をはったり、傷つけられた、

という強烈な思いに囚われたりすることもある。しかしThである彼らは、相手の中に少しでも心が開いたり弱みが見えたりすると、こちらの気持ちはどう和らぎ、どう変わるか、ということも知っている。

非防衛的な面接を実践していると、ThはCIの非言語的な反応だけではなく、Th自身の声のトーンや態度にも気づく。Thが夫に対して「ふと今気が付いたんだけど、私はあなた(夫)に対して、もっと奥さんの話に耳を傾けるようにと説得しようとしていましたね。あなた(夫)もそのように感じましたか」と尋ねたり、また、妻に対して、「今、私が述べたことはあなた(妻)にとってはとても男性的な意見で、気づかぬうちに旦那さんに味方しているように聞こえたに違いないと思います。あなた(妻)はどう思いますか」などと言うのがその一例である。

ThはCIの言葉や行動を軽んじることがない限りはユーモアをはさむこともある。「今、私はファシリテーターとしていい仕事をしていると思いませんか」などのユーモアはその前まで絶望のように思われたセッションに笑いをもたらすことがある。

【結論】

家族/カップル療法を行うPCTのThは一生、勉強の連続である。CIと会い続け、家族/カップルの生活に詳しいスーパーバイザーから学ぶことが最も勉強になる。

実践ではRogersの6条件が明確な指針となる。CIにとって‘共感された’とか‘無条件に受け容れられた’という感覚が強くなる体験であれば、それが何であれ、セラピーを有意義な方向へ導く。逆にその感覚を縮ませる体験は何であれ、セラピーを混乱させ、効果を損なう。Thは、強い感情に巻き込まれた参加者間に積極的な介入によって新たな出会いを促そうとする作業の中で、Rogersの6条件を実践しているのである。Thは家族/カップルの一般的なパターンを知っていることで、家族が持っている、避

け難い難問に立ち向かう彼ら自身の力を一層信頼できる。

【家族／カップル療法を考えるためのポイント】

以下の3点を考えてみるとよいだろう。①もしあなたがCIとして家族やパートナーとセラピーに参加していたら、Thに対し、個人セラピーの場合とどう違って欲しいと願うだろうか ②家族やカップルを個人とは別のものだと見るアプローチにおいて、変化すべき最も重要なことは何であるか、反対に変化させずに残すべき最も重要なことは何か ③セラピーを個人に対してではなくカップルに行うメリットは何か、人々はカップルでセラピーにくることにどのようなデメリットを感じるかという3点である。家族／カップル療法の効果を高め、CIがマイナスの影響を受けないための安全性を高めるためにThは何ができるだろうか。

Ⅲ. 考察

以上の要約にはPCAのThとしていかに家族／カップルに向き合うか、という原則論が書かれている。クライアント中心療法が個人を受容するものであるため、家族／カップルに会うことは、家族成員それぞれの異なる要求の狭間でThは難しい立場に置かれるのではないか、という懸念がある。しかし、O'Learyは、あくまでもRogersの6条件が重要であるという。6条件の重要性の第一点目として、彼は、Thが積極的なファシリテーションによって面接の場を構造化する必要があると説く。なぜなら、既に家族の中ではがっちりと出来上がった反応のパターンに絡めとられ、とても発言などできないと感じているCIにとっては、そのThの構造化によって初めて口にできるようなことがあるからだ、と言う。つまり、彼はセラピーに参加する家族／カップル成員の個人々人を受容、共感するために、家族全体に対する構造化が必要、と論じているのである。

彼が6条件を重視するもう一つの理由は、CIが受容、共感されたと感じる体験はセラピーの進む方向を示す、ということである。つまり、家族／カップル療法であっても、安全感が鍵であり、また安全感を感じてCIが動いていく方向がその家族／カップルにとって動くべき方向である、ということである。“実現傾向を信じ”という言葉にも示されるように、家族／カップルとして進むべき方向は彼らの中から生まれる（彼らに内在している）、という考えがある。

原則論としてはこの通りであるが、この原則論を実用的にするための方法論は具体的で、納得させられるものが多い。例えば、論文の前半に「それぞれの人を理解し、受け入れようとする気持ちであることを積極的に示す」という小見出しがある。なぜ、単に「理解し受容する」でなく、「積極的に(actively)」という語が加わっているのか。それはこれが家族／カップル相手であり、どうしてもある一人のCIに同情が起りがちであり、また、よく話すCIが面接の場を支配してしまいがちになる、という状況では、全員それぞれが大事にされるために、“積極的に”受容・共感を示さなければならない、ということになる。参加者それぞれが大事にされるという安全感の中で、個々の参加者が少しずつ今までは異なる雰囲気を感じ、その変化に注意を向けるようになる。Thは個々の参加者のわずかな変化に気付き、そのわずかな変化によって起こる、家族／カップル間の変化しそよになかったコミュニケーションに小さな揺れが垣間見えてくる。当の家族／カップルはいつものことと見逃していたことの中に、大いなる勘違いや、変化しそよになかったコミュニケーションに変化が起きていることに気付いたThはそれを捉えて言葉にする。もう変化することはない、とCIが諦めていたコミュニケーションの硬い構造に穴が開き始めるのである。

家族／カップル成員個々の尊重をベースにして生まれきたこのコミュニケーションのかすかな変化への対応(言語化)は、PCAの個人療

法と異なる家族／カップル療法の特徴である。しかし、その対応の先に起こる変化の方向性はCIすなわち、家族／カップルが知っている、という考え方は、再びPCAの考えそのものである。ここには病的なコミュニケーションのパターンや家族境界の問題などを分析する、という他の家族療法の学派の考え方が見られない。それどころか、カップル／家族が提示する問題に評価を加えず、参加者の前にそのまま置くだけ、という姿勢が強調されていて、ここにもPCAの哲学が流れている。

こうしてみると、家族／カップルを相手にする、ということと、個人を尊重するという、一見矛盾するような2つのテーマが、個人を尊重するという考え方を軸にして家族／カップルを相手にして見事に統合されていることが分かる。O'Learyは、PCAの哲学を基盤にすることで、PCAの心理療法が個人だけでなく、家族／カップルに通用しうることを示した。しかし、これは家族／カップルに限らず、その他の臨床領域においても豊かな実践があり得ることを示唆しているように思われる。つまり、それは、PCAの心理療法や対人支援を、応答の仕方等の形だけで見るのではなく、どれだけ哲学にまで遡って考えているか、にかかっているのではないだろうか。

文献

- Bott, D. (2001). Client-centered therapy and Family therapy: A review and a commentary, *Journal of Family Therapy*, 23, 361-378.
- Boszormenyi-Nagy, I., & Ulrich, D. (1981). Contextual family therapy. In A. S. Gurman, & Kniskern, D. P. (Eds.), *Handbook of family therapy*, 1, 159-186, New York: Brunner Mazel.
- Chenail, R. J., St George, S., Wulff, D., Duffy, M., Scott, K. W., & Tomm, K. (2012). Clients' relational conceptions of conjoint couple and family therapy quality: A grounded formal theory. *Journal of Marital and Family Therapy*, 38(1), 241-265.
- Gaylin, N. L. (2001). *Family, self and psychotherapy: A person-centred perspective*, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Gaylin, N. L. (2008). Person-Centred family therapy: Old wine in new bottles, *Person-Centred and Experiential Psychotherapies*, 7, 235-244.
- Gottman, J. M. & Gottman, J. S. (2007). *And Baby Makes Three*, New York: Crown.
- Gottman, J. M. & Silver, N. (1999). *Seven Principles for Making Marriage Work*, Three Rivers, MI: Three Rivers Press.
- Greenberg, L. S. & Johnson, S. M. (1988). *Emotionally focused therapy for couples*, New York: Guilford.
- Friedman, F. (1991). Bowen theory and therapy. In Gurman, A. S. & Kniskern D. P. (Eds.), *Handbook of family therapy*, 2, 134-171, New York: Brunner Mazel.
- Johnson, S. M. (2008). *Hold Me Tight*, Boston, M.A.: Little Brown.
- O'Leary, C. J. (2012). *The practice of person-centred couple and family therapy*, London: Palgrave MacMillan.
- O'Leary, C. J. & Martha, B. J. (2013). Couple and families. In M. Cooper., M. O'hara. P. F. Schmid., & A. C. Bohart. (Eds.), *The Handbook of Person-Centred Psychotherapy and Counselling Second Edition*, 282-296, London: Palgrave MacMillan.
- Rogers, C. R. (1957). The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change, *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- Sprenkle, D. H., Davis, S.D., & Lebow, J. L. (2009). *Common Factors in Couple and Family*

Therapy: The Overlooked Foundation for Effective Practice, New York: Guilford.
Stuart, R. B. & Jacobson, B. (1987). *Couple's therapy workbook*. Champaign, IL: Research

Press.
White, M. (2007). *Maps of narrative practice*, New York: Norton.

